

「多数者」の意味と欺瞞との闘い

マルクスは、1848年の小ブルジョア的「社会民主主義者」を鞭うったさい、「人民」や人民の多数者一般についての彼らの野放図な空文句を、とくべつはげしく非難した。第二の意見を検討するにあたっては、すなわち、「多数者」についての立憲的幻想を分析するにあたっては、ほかならぬこのことを思いおこすのが、時宜に適している。

国家において多数者が実際に決定を行うためには、一定の現実的な条件が必要である。すなわち、多数決で問題を決定する可能性をあたえるような、そして、この可能性の現実への転化を保障するような国家制度、国家権力が、しっかりと確立されていなければならない。これが一面である。他面では、この多数者は、その階級構成からみて、この多数者の内部の（またその外部の）いろいろな階級の相互関係からみて、国家という馬車を協力一致のもとにりっぱにうごかしていくことができなければならない。人民の多数者の問題や、人民の多数者の意志にしたがって国政を運用する問題では、この二つの現実的条件が決定的な役割を演じるということは、マルクス主義者ならだれにもはっきりしていることである。ところが、エス・エルやメンシェヴィキの政治的文献全体、彼らの政治的行動全体は、これらの条件の完全な無理解を暴露しているのである。

もし一国の政治権力が、多数者と利害の一致する階級の手にあるなら、実際に多数者の意志にしたがって国家を統治することが可能である。これに反して、もし政治権力が、多数者と利害の一致しない階級の手にあるなら、多数決による統治は、すべて、不可避免的に、この多数者にたいする欺瞞か弾圧かに、転化せざるをえないのである。どのブルジョア共和国にも、こうした実例は何百、何千となく見られる。ロシアでは、経済的にも政治的にもブルジョアジーが支配している。彼らの利益は、とくに帝国主義戦争の時期には、多数者の利益ときわめて鋭く背馳している。だから、問題を形式的、法学的に立てずに、唯物論的、マルクス主義的に立てるなら、問題の要点は、この背馳を暴露し、ブルジョアジーの大衆欺瞞とたたかうことにある。

これに反して、わがエス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーの大衆（「多数者」）欺瞞の道具であり、この欺瞞の案内人であり、助手であるという、彼らの真実の役割を、完全に証明し、実証した。エス・エルやメンシェヴィキの個々人がどんなに誠実であっても、彼らの基本的な政治思想——プロレタリアートの独裁と社会主義の勝利とによらないでも、帝国主義戦争からぬけだし、「無併合・無賠償の講和」をかちとることができるというような、また、この同じ条件がなくても、土地を人民に無償で引きわたすことができ、人民の利益のために生産を「統制」することができるというような政治思想——、エス・エルとメンシェヴィキのこれらの基本的な政治（そして、もちろん、経済）思想は、客観的にみて、ほかならぬ小ブルジョアの自己欺瞞であるか、あるいは、けっきょく同じことだが、ブルジョアジーの大衆（「多数者」）欺瞞である。

これが、小ブルジョア民主主義者、ルイ・ブラン型の社会主義者であるエス・エルとメンシェヴィキがやっている、多数者の問題の取扱い方にたいして、われわれがくわえる第一の、そして主要な「訂正」である。もし多数者ということが、それ自体では形式的な要因にすぎず、実質的には、現実には、ブルジョアジーのこの多数者欺瞞を実行している諸

党の多数者であるとするれば、「多数者」ということに實際上どんな値打があるだろうか？

そして、もちろん——ここでわれわれは第二の「訂正」に、右に述べた根本的な事情の第二のものにたどりつく——、もちろん、この欺瞞は、その階級的根源と階級的意義を明らかにするばあいだけに、はじめてこれをただしく理解することができるのである。それは、個人的な欺瞞ではなく、「かたり」（粗野な言い方をすれば）ではない。それは、階級の経済的地位から生まれる欺瞞的な思想である。小ブルジョアの経済的地位、その生活条件は、彼らが自分を欺瞞せざるをえないようにできあがっている。小ブルジョアは、心ならずも、そして、不可避免的に、ときにはブルジョアジーのがわへ、ときにはプロレタリアートのがわへ傾く。**経済的に、彼らには独自の「方針」はありえないのである。**

彼らの過去は彼らをブルジョアジーのがわへ引きよせ、彼らの未来は彼らをプロレタリアートのがわへ引きよせる。彼らの判断は彼らをプロレタリアートのがわへ傾かせ、彼らの先入見（マルクスの有名な表現をもちいれば）は彼らをブルジョアジーのがわへ傾かせる。人民の多数者が、国家の統治における真の多数者になり、多数者の利益に真に奉仕するもの、多数者の権利を真にまもるもの、等々になるためには、一定の階級条件が必要である。その条件とは、小ブルジョアジーの多数者が、すくなくとも決定的な瞬間に、決定的な場所で、革命的プロレタリアートに味方することである。

これなしには、多数者は一つの擬制である。それは、しばらくは維持され、輝き、ひらめき、ざわめき、たたえられるかもしれないが、結局、破綻は絶対に避けられない。ついでにいえば、ロシア革命で 1917 年 7 月に明らかになったエス・エルとメンシェヴィキの多数派の破綻は、まさにそれであった。

さらに、革命が国家の「通常の」状態から区別される点は、まさに、国家生活のいろいろの係争問題が、武装闘争までもふくむ諸階級の闘争と大衆の闘争によって直接に解決されるということにある。大衆が自由となり、武装している以上は、こうなるほかはないのである。この基本的事実から出てくる結論は、革命期には、「多数者の意志」を表明するだけではたりない、ということである。いな、決定的な瞬間に、決定的な場所で、**より強いものとなっていなければならないのである、勝利しなければならないのである。**中世ドイツの「農民戦争」から、すべての偉大な革命運動と革命時代を通りぬけて、1848 年と 1871 年にいたるまで、また 1905 年にいたるまで、組織と自覚と武装においてすぐれた少数者が、自分の意志を多数者に強制し、多数者を打ちやぶった実例は、数かぎりなくある。

フリードリヒ・エンゲルスは、十六世紀の農民蜂起と 1848 年のドイツ革命とにある程度共通している経験の教訓を、とくに強調した。すなわち、被抑圧大衆の行動が細分され、彼らの小ブルジョア的な生活上の地位にむすびついて、彼らの力の集中が欠けていたということがそれである〔第 16 巻、138~141 ページ〕。この側面から問題をとりあげても、われわれの達する結論は同じことである。小ブルジョア大衆の多数者だけでは、まだなにも決定しないし、決定することもできない。なぜなら、農村の幾百万の分散した小経営主に、組織性や、その行動の政治的自覚や、行動の集中（勝利のために必要な）など、これらすべてをあたえることのできるのは、彼らにたいするブルジョアジーの指導か、それともプロレタリアートの指導か、そのどちらか**だけ**だからである。

周知のように、社会生活の諸問題をけっきょく決定するものは、もっとも激しい、もっとも鋭い形態、すなわち内乱の形態における階級闘争である。ところで、この戦争では、

およそあらゆる戦争のばあいと同じように、問題を決定するのは経済である。これもまた、原則上はだれ一人異論をとねえるものがない、周知の事実である。エス・エルもメンシェヴィキも、「原則上は」このことを否定しておらず、今日のロシアの資本主義的性格をよく心得ているのに、真実を冷静に直視する勇気をもたないということは、きわめて特徴的な、意味深長なことである。彼らは真実を、すなわち、ロシアをふくむあらゆる資本主義国が、基本的に、ブルジョアジー、小ブルジョアジー、プロレタリアートという三つの根本的な、基本的な勢力に分かれているということ、みとめるのをおそれている。この第一の勢力と第三の勢力については、だれでもかたっているし、だれでもみとめている。だが、第二の勢力——すなわち、数のうえではまさに多数者たるところの！——については、経済的見地からも、政治的見地からも、また軍事的見地からも、これを冷静に評価しようとはしないのである。

真実は耳に痛い、——エス・エルとメンシェヴィキが自分を認識するのをおそれているのは、結局は、これなのである。

第 25 卷 P216~219 『立憲的幻想について』 1917年7月26日(8月8日)に執筆

ポイント

国家において多数者が実際に決定を行うためには

国家において多数者が実際に決定を行うためには、一定の現実的な条件が必要である。すなわち、一面では、多数決で問題を決定する可能性をあたえるような、そして、この可能性の現実への転化を保障するような国家制度、国家権力が、しっかりと確立されていなければならない。他面では、この多数者は、その階級構成からみて、この多数者の内部の（またその外部の）いろいろな階級の相互関係からみて、国家という馬車を協力一致のもとにりっばにうごかしていくことができなければならない。

多数者欺瞞との闘いの必要性

もし一国の政治権力が、多数者と利害の一致する階級の手にあるなら、実際に多数者の意志にしたがって国家を統治することが可能である。これに反して、もし政治権力が、多数者と利害の一致しない階級の手にあるなら、多数決による統治は、すべて、不可避免的に、この多数者にたいする欺瞞か弾圧かに、転化せざるをえないのである。だから、問題を形式的、法学的に立てずに、唯物論的、マルクス主義的に立てるなら、問題の要点は、この背馳を暴露し、ブルジョアジーの大衆欺瞞とたたかうことにある。

彼らのいう「多数者」は欺瞞によって多数になっているということ。これが、われわれがくわえる第一の、そして主要な「訂正」である。

われわれの第二の「訂正」は、小ブルジョア大衆がブルジョアジーの指導の下で「多数者」となっていることを覆い隠していることである。

小ブルジョアの経済的地位、その生活条件

小ブルジョアの経済的地位、その生活条件は、彼らが自分を欺瞞せざるをえないようにできあがっている。小ブルジョアは、心ならずも、そして、不可避免的に、ときにはブルジョアジーのがわへ、ときにはプロレタリアートのがわへ傾く。経済的に、彼らには独自の「方針」はありえないのである。

彼らの過去は彼らをブルジョアジーのがわへ引きよせ、彼らの未来は彼らをプロレタリアートのがわへ引きよせる。彼らの判断は彼らをプロレタリアートのがわへ傾かせ、彼らの先入見は彼らをブルジョアジーのがわへ傾かせる。

人民の多数者が、国家の統治における真の多数者になるためには

人民の多数者が、国家の統治における真の多数者になり、多数者の利益に真に奉仕するもの、多数者の権利を真にまもるもの、等々になるためには、一定の階級的条件が必要である。その条件とは、小ブルジョアジーの多数者が、すくなくとも決定的な瞬間に、決定的な場所で、革命的プロレタリアートに味方することである。これなしには、多数者は一つの擬制である。それは、しばらくは維持され、輝き、ひらめき、ざわめき、たたえられるかもしれないが、結局、破綻は絶対に避けられない。

革命期には、「多数者の意志」を表明するだけではたりない、決定的な瞬間に、決定的な場所で、より強いものとなっていなければならないのであり、勝利しなければならないのである。